ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

スリザス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

【Ｎコード】
Ｎ９１４０Ｚ

【作者名】
スリザス

【あらすじ】
前世が日本人で異世界転生したが、村八分で貧乏極まって自殺寸前。
そんな悲惨な境遇の開き直り型主人公がひょんなことから幼女な神様の使徒に。
色んな能力を貰ってダンジョンで暴れまくり、治癒能力やアイテムで怪我人や病人を治したり、商売をして優秀な部下を得て、領地を手に入れて内政したりして活躍する予定。
しかし元の村ではあい変わらずつまらない村人たちに迫害され続け

る物語。

※ただの暇つぶしの書き殴り作品です。
ハイリスクノーリターンノークレームの軽いノリでお楽しみください。

第1話　胎動

よく小説とかで転生とか生まれ変わりとか聞くけど、俺はそういうものは信じていなかった。

死んだら人間はそれまで。赤子でもわかる真理のひとつだ。

大体にそんな誰もかれもが生まれ変わっていたら、何十代もの大昔の記憶とかが延々と残っててまったく思い出さないとか実際おかしいだろ？

まあそれ以前に記憶は脳にあるもので、生まれ変わりで前世の記憶とかがある方がもっとおかしいと思うんだが……

何が言いたいかというと……

「何で俺に前世の記憶があるんだよ！」ってことだ。

前世の記憶、俺が日本という国に生まれ、牛丼のサンボでワンコインで大盛りを頼み、そして暴走トラックに撥ねられて死んだまでの人生の記憶。

気楽な小説の中では転生なんて好物ですとか言われてそうだが、自分で経験してみるとこの記憶は今の世界、なんというか異世界っぽいところでは邪魔モノでしかなかった。

何しろ赤ん坊の頃からぼんやりとだが自我があった。そのせいで日本人としての精神ではちょっと耐えにくいようなことが次々と経験させられ……

生きてる芋虫を食べさせられたのはカルチャーショックどころではなかったよ。今では気にせず食べられるけど。

他にも笑わない子とかのレッテルをつけられ、下手に日本語の下地があるおかげで言語の習得が平均よりだいぶ遅れたり、素直に子供として振舞えないから何を考えてるかわからないとか裏で何してるかわからないとか、西洋人が日本人を、田舎の人間が都会の人間を表現するような評価をいただきまくったり、色々と酷い人生を送ってしまった。

日本人の知識を利用してチートしまくり？

まったく無理。

というか無理。

絶対無理。

ちょっと考えればわかると思うが、清く正しいヘタレ日本人が中世レベルのところに転生して幸せに生きられるかと。

ほんのちょっとでも周りと違うことをするとすぐ注目される。その

注目ってのも悪い意味での注目だ。いわゆる魔女裁判のような雰囲気になる。

算術が出来れば就職できる？

就職が出来るのはお偉いさんの身内とそのご機嫌をひたすら取れるクズのみ。

むしろ高度な能力なんて見せたら、拉致されて奴隷として高値で売られて一生無賃で働かされるだけだ。

ここら辺のクズさ加減は、前世の世界となんら変わらない。

出来ることと言えば周りと同じことをするだけ。

それも力仕事ばかりで理系人間の俺にはついていけず、無理をしすぎて半病人のような状態で今まですごしてきた。

ま、その話は今は置いておいてもかまわない。ぶっちゃけ今そんなことを気にしてる状態じゃあない。

わかりやすく言うと「村八分されてて、親が行方不明で、我が家の経済状態が最悪で、体調も悪くて、夜逃げ寸前だけど逃げる場所も無い」という感じ。

もうどうしようもない。

左手に首を吊るロープがスタンバってるんだ。

あまり仲が良いとも言えない両親は、半年前に二人で王都に出稼ぎに行ったがそれ以降なんの連絡も無い。

兄貴がいたが俺が5歳のころに魔物にやられて死んだ。

つまり身寄りが一切無い。

「おわた。人生またおわった。神様つまらない人生をありがとう」

でも最後になんか美味しいものでも食べたいな。

裏手にあるみすぼらしい倉の中から売れるものとかを物色するか。

どうせ売るのも面倒になるような値段のゴミしかないんだろうけど……ね。

今までダルくて調べなかったような物資もすべて調べまくるために、荷物は全部外に出すようにする。

かなり大掛かりな物色だ。子供の頃から探検みたいに何度もしてるが流石にここまで大げさにしたことはない。

何か良い値段で売れるものでもあれば……と期待はするが、内心では殆ど諦めている。

今こうして倉庫を調べてるのも、結局は惰性みたいなものだ。

でもま、何もしないよりは気が晴れる。

そしていくつかの剣や篭手やらのあまり高価でなさそうな冒険者用の装備以外はボロ布や木製のガラクタなど大したものも見つからず、最後の荷物を調べる。

「何だこの箱、重すぎる。　いや、これ床に引っ付いてるのか」

動かそうとしたときの感覚が、重いものとしては何か違和感が感じる。

中がまるで空っぽのような感じの頑丈な木箱の蓋を開けてみると予想外に軽く開いた。

「なんですか、コレは……」

どう見ても階段。

斜め横から見ても上から見ても階段。

多分、前と真横からだと木箱にしか見えないが。

おそらく地下室へと繋がっているんであろうと思われる階段の奥は、光ゴケでも使われているのかボンヤリと明かりが見える。

いったいその先に何があるのか。

予想その1はお宝がザックザクと。あるわけないだろと自分でツッコミいれられるが。

予想その2は親父の隠し酒蔵だが、隠す意味あるのか微妙？

予想その3は迷宮。うちの倉はダンジョンの上にたっていた！　わけないよね。

危険があるかもしれないので、見つけた装備を適当に身につけてから降りることにする。

「さて、鬼が出るか蛇が出るかいっちょ行ってみるか」

第2話　受肉

「うおおおおおおぉぉぉ、凄いなこれ」

階段は予想以上に狭くて長かったが、特に問題なく最深部まで到達。１００畳以上あるような広さの部屋の入り口から中を眺めると、高価な明かりの魔道具によって煌々と照らされる純白の石つくりの壁面、そして中心後ろよりに設置された荘厳なつくりの祭壇。

そこはまるで以前にクラスの取得のために行かされた神殿のような雰囲気がする場所だった。

ちなみに取得したクラスは〈村人Ｆ〉である。村人にもランクがあってＦは貧民みたいなものさ。ハハハ。

あまりの光景に数分ほど呆けていたが、とりあえずお邪魔しますと小声でいいながらオズオズと部屋に入っていく。

入り口からもみえていたが、祭壇の御神体はどうやら女神様のようで、槍を持った凛々しい戦乙女のような大きな彫像が異彩を放つ。

祭壇への緩い階段を昇ると、その御神体の大きさに圧倒され、まるで実際に神様の前に連れられて右往左往するちっぽけな人間のような感覚になる。

そんな雰囲気に流されてではあるが、唯一知っているこの世界での神への祈りの聖句を思わず口ずさんで祈りをささげる。

「いあ　いあ　くとぅるふ　ふたぐん！　……」

そして何かわけのわからない達成感を得つつも、いったん今後のことを考えるために帰ろうと祭壇を降りると、視界の隅のテーブルのような場所の上にさっきまでは無かったはずの彩りが見える。

「ん？　なんだ？」

一見してみると果物や肉、っていうか食料に見える。一応近づいてみるとやっぱりなぜか食料が山盛りに置いてある。しかもかなりの高級品ばっかりに見える。この世界で17年生きてきたがいつも芋と雑穀と野草ばかりで、ここまでの高級品はそう何度も食べた記憶すらない。

「これってもしかしてお供え物だよな。でも誰がいつの間に持ってきたんだ、さっきは絶対に無かったはずなのに」

そういって姿形がリンゴもどきのティーアコと呼ばれる果物を手にとって見る。

（うーん、凄い良い香り。すみません、もう我慢できません）

空腹もあいまって、ついつい口に運んでしまう。

大きなティーアコにかじりつくと、リンゴとオレンジの合わさったようなみずみずしい味が口の中に広がって、久しぶりの美味に歓喜が生まれる。

それからはもう、俺は飢餓感に押されて堰が切れたように完全に無心のままひたすら涙を流しながら貪るように食い漁った。

そして腹も膨れてもう食べられないといった状態になると、途端に正気を取り戻す。

「俺はなんてことを……神様への供え物を横取りとか、神罰下るぞ……」

しかし何でこんな隅のほうに供え物が置いてあるのか。

普通は祭壇の方に供えるはずでは？

もしかしてお供え前にいったん置いてあるだけか？

とりあえず食べてしまったからには仕方ない。

俺は開き直ってはみたものの、このままやってしまったことを捨て置くには堪えられない心境だったので、自分なりの誠意を見せようと、まだ半分以上余っている食料のうちのいくつかを見繕って抱え、

「すみません、神様。お供え用の料理を作ってまいります」

と、一応逃げるわけではないと宣言をしてから階段を上がって家にまで戻る。

そして台所の竈に火を起こしながら、作る料理の内容を決めていく。

（燻製肉は塩気が強いからこのままじゃ食べにくいだろう。なら削り取ってスープのダシにしようか。後、この粉物はパンを焼こうかな。日本で食べたような柔らかいものは無理だろうが焼きたてはおいしいはず。それとこっちの野菜は干しキノコからダシをとって浅漬けにしてみようか）

和洋中華がごちゃまぜだが、もう気にしない。

第一、日本の定食屋のメニューとか弁当とかもそういう部分はめちゃくちゃだったし。

感性が日本人なんだから仕方ないだろ？

元日本人舐めんなよって意気だ。

そしていままで材料すらなかった為に発揮できなかった日本人としての食への拘りをフルに発揮して渾身のメニューを作り上げる。

「出来た！　これが俺の究極のフルコースだ！」

まあそこまで言うほどのものでもないが、日本人としての感性で作ったから、この世界でのまずい食文化からは多少は逸脱したものが作れたはず。

特にさっき味見した、白身魚のフライのタルタルソース添えとかはこっちにはまず無い料理で絶品である。

一応来客用の食器に盛り付けたがやはり供え物としては食器が微妙に見える。

だがせいいっぱいの努力はした。

後は冷めないうちに持っていくだけだ。

祭壇の部屋への階段を足早に降りていくが、何故か普段より体調がよくて足取りが軽い。

おそらくあの時たらふく食べたせいだと思う。

栄養素が足りなかったんだろうな、色々と。と今までのあまりの自分の貧しさに今更ながら呆れてくる。

前に聞いたことがあるが、日本人は昔は寿命が５０年だったらしい。

それだけ食べ物ってのは体調に直結する。

それに未開人は薬が異常に効きやすいってのとかも関連して、必要な栄養分が色々と足りなかったために今回過剰に体調と栄養摂取が直結したんだろう……

「お待たせしました。神様」

返事がかえってくるはずもないが、一応気分として口に出しながら祭壇の台の上に料理を捧げる。

そもそも殆どの宗教が、返事もしない神様に祈りをささげてるのだから俺がこうして神に語りかけても可笑しいと言われる筋合いも無いだろう。

「神様の為に精一杯がんばって料理をさせていただきました。気に入ってくださりましたら先ほどの無礼はどうかどうか水に流してくださるようお願いします～」

大げさにジェスチャーを加えながらひたすらペコペコと謝る。

「で、では、ごゆっくり」

なんだか態度にレストランのウェイターとか怪しいホテルの従業員とかが若干混じっているようだが、気にせずに強引にすます。こういうのは勢いが重要なのだ、そうに決まってる。

とりあえず逃げ帰るように部屋の入り口のほうまで後退した俺は――

――

祭壇のところに設置されている高さが人の背丈ほどもある鏡、いわゆる姿見から――

なにやらちんまい幼女が、ごく自然と現れて、俺の作った料理をパクっとほおばるのを

――見た――

第3話　邂逅

えええええ、なにしてくれちゃってるのこの幼女は。

いや、というかむしろこの娘が神様？

た、確かになにか神々しい感じはするけど、御神体とかけ離れすぎだろう？

身長とか、特に胸のボリュームとかがＡ－からＨ＋までかけ離れてる。どっちがＡ－かは察しろ。

とりあえず状況把握の為に祭壇そばまでにじり寄る。

特に警戒される様子もなく、なんというか緊張感の欠片もなさそうな雰囲気だったので更にそばまで近寄った。

こぼれるような無邪気な笑顔でこちらを見つめる女神様？

近くで見ると、あの有名な〈赤さんの成長後〉と噂された写真の美

少女のような顔立ちである。実際は違うらしいが。
こちらは金髪、いわゆるブロンドヘアーだけどね。
あ、ほっぺにタルタルソースついてる。

「え、えーと、お味のほうはどうでしょうか？」
「おいしい！」
「そ、そうですか」
「おいしいね、これ～」

そういってちんまい女神様が食べてるのは俺の渾身の作である、白身魚のタルタルソース添えだ。

あ、今度は鼻の頭にタルタルソースがついた。

「お兄ちゃん、料理上手なんだ？」

これは、この眼はあれだな。よく小学生とかに一発芸とかを見せると妙に興奮してウケられて、そのまま尊敬されもみくちゃにされ、おまけに膝を蹴られまくるアレだ。

「えーと、はい……ありがとう？」

天使のような笑顔でパンにパクつく女神様。

ダメだ……あまりの状況に俺の頭はパニック寸前でどうにも事態の把握が不可能である。

この状況は、これからいったいどうすれば良いんだ……

解決の糸口になりそうなこの幼女は食事に夢中で会話になりそうも無い。

というか、この無邪気な笑顔には、色んな質問とか小難しい理屈とかがまるで通用しそうに無い。

ぶっちゃけて言うならば、手持ち無沙汰でこの場に居るのが苦痛である。

もうさあ、この幼女様が食事に一息ついたらストレートに聞いてみるしか方法はないんじゃないか。

というわけでしばらくウニウニとしながら（チクチクと刺されるような心地で）まってみて、ここぞというタイミングを計って聞いてみた。

「あ、あのー」

「なーに？」

「もしかして……貴方が女神様ですか？」

「うん！」

「おおお、やっぱり。あまりにも御神体とあんなとことか……」

ヤバっ、最後のほうとか小さな声で言ったのに、今一瞬幼女様の眼が凍ったように見えたよ。この話題は禁句ですね。

「そ、そうだ。実は先ほどあそこのテーブルに置いてあった食料をわたくしめが食べてしまいまして。この食事の材料もそうなんですけど。その節は大変たいへん申し訳ないことをいたしまして……」

俺は使い慣れないヘタレな敬語を使って、深く頭を下げて素直に謝ってみた。が、

「あのテーブルの上？　はお兄ちゃんのものだよ」

「は？」

「だからね～、ここでお兄ちゃんがウニューンとお祈りを捧げると、神様パワーが充電されて、あそこのテーブルにジュバっと神の実りが出てくるの」

「神の実りとはナンデスカ？」

「信徒へのぷれぜんと？」

「えええ、なんという太っ腹な。神様って信仰だけ要求して何もくれないのが普通なんじゃ……」

「それ神様じゃなくて多分悪魔だよ～、『悪魔を信仰してるとこは世界に醜い争いが絶えない』ってたしかお姉ちゃんが言ってた」

「な、なんだってぇぇぇぇぇ」

第４話　使徒

「２０年ぐらい前にこの辺りに来てね。バッシューンってこの神殿を作ってみたの。で、その後はお昼ねしてたの～」

俺はあれから素直にこの幼女様の話を聞き入ってる。

この祭壇の部屋は一応神殿だったようで、しかし神様ゆえのあまりの気の長さからか、作った後は興味を失い放置されて、そのまま２０年ほどだらだらと寝て過ごしたそうだ。

それが今回俺が祈りを捧げたのをきっかけに眼が覚めて、更に美味しそうな匂いがしたのでこっそり実体化して食べにきたそうな。

しかし何でこんなド田舎の地下深くの目立たないところに神殿をと思って理由を聞いてみたのだが、「えへへ」と笑ってはぐらかされてしまった。なんとなくだが明確な理由がまったくなさそうに思えるのは俺だけだろうか。

もしくは思いもよらないようなとんでもない理由があるかもしれない。ほんとは無いと俺は思ってるけど。

少し考えにふけって幼女様から眼を離していたが、気がつくとじーっとそれこそ穴が開くような視線で俺を見つめている。

なんというか、これは、尋常じゃあない気配が漂ってる。

俺は思わず身をすくめる。

なりは小さくても幼女様は女神様、それを忘れてはいけない。

「すごーい、お兄ちゃん、珍しい記憶持ってるね」

「！」

まさか、俺の前世の記憶を――――読まれた？

「日本？　ジャパン？　ジャポニカ？」

「ジャポニカは違う。学習帳。いや、違くはないのか」

なんだろう、いきなりシリアス成分がめっちゃ大げさに吹っ飛んだ気がする。

つい死んだマグロの眼をして〈それはないのＡＡ〉みたいな感じで手を振って否定してしまった。

刷り込まれた習慣というものはホント恐ろしい。

「さっきの料理はお兄ちゃんの故郷のものなんだね。わたしまた食べたいな～」

「うーん、でももう材料がそこまでないから。材料さえあれば一応は作れます」

「なら今から出そう？　祈りの聖句を私に唱えて～」

「聖句ってあれですか、ぶっちゃけ本当は聖句は知らなかったもので前世でのを適当に唱えてしまったんですが」

俺は冷や汗をだらだら流しているような心情で、まさしくぶっちゃけてみた。

「大丈夫。凄い祈りの力が感じられて、神様の力も沸いてきたから！」

「じゃ、じゃあ、やってみますね。失敗しても許してね」

「お兄ちゃん、準備いいよ～」

「では失礼して――――てぃび　まぐぬむ　いのみなんどぅむ　しぐな　すてらるむ　にぐらるむ　え　ぶふぁにふぉるみす　　さどくえ　しじるむ　……」

「凄いパワーが来てるよ！　後は任せて！　ぼっちりだよ」

その時、視界を真っ白にさせるほどのまばゆい光が！――――なんてこともなく、ただ例のテーブルに視線を向けると、

テーブルとかまったく見えないぐらい食料品で埋まってるし。

てか、あれに見えるはレトルトのカレーじゃないか？　なんであんなもんも混じってるのよ。

他にも日本製品らしきものがいくつか。メイドインジャパーンきたわあ。

「凄い、凄い、いっぱいでた～」

「ちょっと出すぎと思われますが」

「これでずっとお兄ちゃんの手料理が食べれるね！」

キラキラとした眼で期待されてしまったが、しかし俺は、

「うーん、多分それは無理……」

「え？　駄目なの？」

「いや、実はこれから自殺しようかとおもってたり」

えっと、あまりのことに幼女様がぽかーんと口を開けて呆けています。

俺は今までの事情をとりあえず幼女様に説明することになった。

「うっ、ううっ、お兄ちゃん可哀想……」

なんか自分が泣かせてしまったようで罪悪感がハンパない。

「というわけでもう生きてるのも無理かもしれないんだ。まあ祈りで食料が出せるなら食いつなぐことは出来るかもしれないけど税金とか払えないし」

「む」

「それと食料とかを売ろうとしても大量には無理だと思う。村の中で売買用のルートが決まってて不自然に多く売ったら怪しまれて、相場を崩した罪とか言われて商人どもにどんなめにあわされるのかすらわからないんだよ」

「む〜」

「むう……」

「あっ、だったら！　お兄ちゃん、使徒になってみない？」

「むむむ？　神の使徒ですか……また随分と大事に」

「うん、多分お金も稼げるし、三食昼寝付きだよ」

「なっ、どこでそんな言葉を（まあ予想はつきまくるけど）……えっと、お願いします」

「わ～い。使徒げっとだよ～」

「げっとされました」

第5話　魔法

「晴れて神の使徒となったわけですが」

「ですが～」

幼女神様はニコニコと笑って相槌をうっています。

なんていうか、イイね。こういうのは。

あまりにも荒んだ生活のせいで忘れてた感情が湧き出てくるようだ。

「私はなにをすればよいのでしょう？　使徒として」

「美味しいものを作って！」

とりあえずよだれは拭きましょう。幼女神様。

後、それ使徒の役目違うから。

「いや、それ料理人というかコックというか」

「ご飯、ご飯！」

幼女神様の背後に、勢いよく振られる小犬の尻尾のようなものが見えような気がするのは錯覚であろうか。

やるせない思いを抱きつつ、まずは溢れかえった食料品をチェックする為に下に降りる。

正直このままでは俺が食われそうでやばい。

手早く食べられてしかも美味しいものを見つけ出さなくては……

「幼女神様、これなるは桃缶でございます」

「桃缶～」

幼女神様は、高級な缶詰によく見られるペナペナのカバーっぽいのをペコペコと押して遊んでおられます。

なんという可愛らしさ！

爺は爺は！

ひとりノリツッコミは空しいからやめるとして、

「食べてみましょうか？　しかしこれは冷やすと更においしゅうございます。ですが冷蔵庫などはございませんから難しいところですね」

「冷たくするとおいしいの～？」

「はい。それはもう格別に。爺やに魔法が使えれば冷やしてさしあげるのですが、残念ながら爺のクラスは〈村人F〉だけで御座いますゆえ」

「えい！」

「ああっ、何をなさいます、お嬢様！」

なんだこれ、シビビっとビびれて……

ああ、やっぱお嬢様と爺やごっこはウザったかったのか？

そして俺は意識を手放した……

「でも3秒で回復したわ」

「お兄ちゃん、もう魔法が使えるよ？」

「何ですと！」

そう俺はさっきの痺れでなんと、桃缶の魔法使いになっていた。もとい魔法使いのクラスを得ていた。

「まだいまいち実感が無いのですが、さっそく魔法を使って冷やしてみることにします」

「わーい、パチパチ」

ちなみにこっちの世界、村人でも一応魔法は使える。

3時間ぐらいウンウンうなってると蝋燭の炎ぐらいの火がボーっと0．5秒出るぐらい。

……うん、役立たずだよね。

やっぱ魔法って憧れるから、結構練習はしたんだけど、どうやら詠唱とか技術とかよりもイメージ力とかクラスとか才能がものをいうらしくて、役に立つ程度のレベルにすらならなかった。

しかもこっちの世界では魔法が使えるゆえに、科学文明の発達が遅れているという有様。

まあそうだよね。大体に現象に対して魔力とかで計算しにくい結果

が出るのなら、しっかりした検証結果を必要とする科学とか発達しにくいのは当たり前。

とりあえず、氷の魔法……は、カチンコチンになると食えないし、流水の魔法……冬の川のイメージで……いや、これも水浸しになりそう。

ならば冷凍庫に３０分ぐらい入れたときの、缶の表面に軽く霜がつくイメージが丁度いいかな？

「桃缶よ。我が意に応え、冷たくなあれ！　ＢＥ　ＣＯＯＬ！」

おおお、なんか今までに無い感じで魔力が湧き出てくるのがわかる！

これが役に立つレベルの魔法の感覚なのか。

普段はジョボジョボとホースから水が出てるのを、ホースの先を指で潰して、勢いよくビューッっと出させるような感じ。男なら誰でもわかるアレだ。

それが右手に持った桃缶にまとわりついて、世界を変革していくのが手にとるように感じられる。

たちまち、その手のひらには冷凍庫から取り出したばかりのような冷たさがビンビンに伝わってくるようになった。

「やりました。お嬢様、程よい冷え加減でございます。さっそく開けてみますね」

「はやくはやく～」

「ほっ」

プルトップに爪を引っ掛けてパコッと開けると、ほのかに甘い匂いが漂う。

「では、まず爺やが先に味見をしてみます」

「えー」

「おお、これはまったりとしてコクがあって滑らかで……」

「むーーむーー！」

「白桃とシロップの冷たさが共に絶妙。口の中に含むと桃源郷に迷い込んだ気分です」

「むううううう！！！」

「なんという至福。まるで秋山の魔法にかかったかのよう！」

「えい！」

「ああっ、ガガガ、シ、シビビれれれ」

「ふーんだ！」

「こ、これはもしかしてさっきのおおお。まままさかまたもや新しいクラスを手に入れちゃったりしちゃいますかががが？」

「ううん」

やっぱそうですよね。うん。

第6話　狡猾

幼女神様は只今ニコニコと笑顔で桃缶を頬張って、というか桃缶の中身を頬張っています。

しかし油断してはいけません。

私は前回知ってしまったのです。

この方が案外でんじゃらすな性格をしていることを！

「では、わたくしめはいったん住まいのほうへ戻らさせていただきます。これからも料理を作るために色々と準備する必要が御座いますので」

「うん。はやく戻ってきてね」

「出来るだけ努力はいたしますが、なにしろ色々と問題が山積みでして3時間ほどはかかるかもしれません」

「じゃあ、行っちゃだめ」

「……」

でたよ、子供の我がままが……

『はやく戻ってきてね』と『行っちゃだめ』のコンボに微妙に萌えたのは内緒だが。

というか、我がままが可愛いのは非力な子供がやるからであって、神様にやられるとホントやばいよね。色々と。

仕方ない、ここは俺の老獪な会話テクニックを駆使して見事に切り抜けてみようか。

「お嬢様、今から上にいって、まさしく舌がとろけるような甘くて美味なるものを作ってまいりますゆえ、戻ってくるまではお待ちいただけますか？」

「行ってらっしゃい！」

ふっ、ちょろいな。

「では行ってきます。帰ってくるまでに口寂しくなりましたら、こちらの袋に入ったポテチなるものを食してください。パリパリとした食感が面白く、中々の美味しさで御座います。ただし食べすぎには注意ですぞ。2袋までにおさえますように」

「ん、わかった～」

幼女神様に手を振られつつ、ようやく切り抜けたと内心思いながら、俺は選び抜いた食材を両手にどっさりと抱えて自らのアジトへと足を運んだ。

「さて、甘いものを作ると言っておいたから、いくつか用意はしておかないと。しっかし基本的な調味料まであったのは幸運だな。これで色々と日本のメニューを再現できる」

そうなのだ。あの食材の中には、塩や砂糖のみならず、醤油や味噌、その他色んな調味料まで入っていたのだ。

ちなみに植物油は最初の食材の中にもあった。

ただ生クリームとかバターとかは今回は見当たらなかったので、お菓子を作るのにも制限がかかる。無理をすればミルクからも作れそうだが今は機材も無いし、量を作りにくい。

そこでミルクと苺と砂糖が揃っていることに気付き、一品目のメニューは自然と決まった。

日本人ならおなじみの苺ミルクである。

作り方としては苺を潰してミルクをぶっかけて砂糖で味付けという

案外簡単なデザートだが、これは素人の作り方。

苺とミルクと砂糖が織り成す至高のハーモニーはこの方法では生まれ出でえないのだから。

完成した際に、苺の部分とミルクの部分、それぞれが絶妙な甘みを独立して持ってこそ本当の苺ミルクなのだが、多くの人間たちは砂糖味のミルクに苺を潰したものを混ぜただけのものを苺ミルクと崇拝してしまっている。

結果として、ミルクの人工的な甘味と自然な甘酸っぱさの苺が、甘いだけの苺風味ミルクとひたすら酸っぱく感じられる苺部分とへ味が分離してしまうのだ。ハレーションを起こしてしまって、至高どころかただ癇癪を起こして暴れる困ったおっさん風味の味へと堕ちてしまう……これは絶対に許せない。

まあ実際には〈あまおう〉などの高級な品種を使えば苺がミルクの甘味に負けずにそれなりのものは出来るのだが、苺ミルクには安物の苺を使うということは宇宙の真理であり、それに反することは恥ずべきことなのだ。そうに決まってる。

そこでまずは苺の表面の甘い部分のみをスプーンなどで削って分離させる。量的にはそこまでなくてもいい。これはよく苺のムースなどで飾り付けに用いられる苺の部分に相当するのでバランスが重要なのである。次に苺の芯と残りの苺をミキサーにかける。ちなみにミキサーは俺の手作りだ。そこに砂糖を程よく加えてそのまま数時間置いて馴染ませる。

その間に削った苺の赤くて甘い部分を、少な目のミルクとおおめの砂糖を加えてあえておく。イメージとしてはこの部分のみで練乳をかけた苺の味に仕上げるのだ。こうしてしばらく置いたまま、最後

に両方を混ぜてミルク部分の砂糖を調節して出来上がる予定である。

さて、次は何をしようか。

もう一品作る前に、ふっくらとしたパンを焼く為の天然酵母でも仕込んでおくか。

そうして作業は弾み、３時間は瞬く間に過ぎていったのだった。

カツカツと靴音を慣らして、祭壇の部屋への階段を降りていく。

勿論、両手には至高の苺ミルクを筆頭にいくつかのデザートがのったトレイを持っているのである。

「お帰りなちゃい～」

満面の笑みで迎えてくれる幼女神様。おお、なんと神々しい……

しかしそこで俺はある異変に気付いた。

前は１０袋はあったはずのポテチの袋が、何故か今はどこにも見当

たらないではないか。

「食べてない」

「……」

「食べてないもん」

「……」

「お羽が生えて、飛んでいっちゃったの」

「……はあっ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9140z/

ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

2011年12月28日20時57分発行